《2》家族の変容と子育て

②対談　新しいステージの家族と子育て支援

【司会】少子化が本格化する中で、家族の子育て機能を支援していく必要が盛んにいわれ様々な支援策が論議されていますが、この対談では、子育て支援のあり方やその質について、いわば、「子育て支援原論」を渡辺先生と大豆生田先生にご議論いただきたいということで、お忙しい中お時間をさいていただきました。というのも、子育て支援サービスは、預かり保育の量的拡大として論議されがちで、当事者である子どもや親の本来的ニーズをどう捉えるのか、また、家族の子育ての主体的な力をどう築いていくか、といった点までなかなか議論が深まっていないのではないか、と思われるからです。どうぞよろしくお願いいたします。

1　対人サービスとしての家族支援のあり方―臨床や保育の現場でのケースから

母親の不調と赤ちゃんの不安定―救急外来のケース

渡辺先生は、この小児科での臨床から、たくさんの家族の子育て問題にふれられている、と思うのですが、今、家族はどのような困難に直面しているのでしょうか。

【渡辺】私の診療は小児科ですが、わりと現代的な問題が飛び込んできます。

例えば、先日の日曜日に緊急に呼ばれ、病院での診療をしましたが、このケースは、お父さんが外国に出張に行かれるその直前の夜、救急外来に、母親が「この子がおかしい」と預けられたのです。

赤ちゃんは問題なく、お母さんが疲れ果てていて、落ち込んでやせている。お母さんが普通のハッピーな状態じゃないということは一目瞭然なのです。

家族の状況は、夫は外国出張が多く、心配してくれるけれども現実に遠くに行ってしまって共に生きてくれない。実家の母親は「救急外来に赤ちゃんを預かってもらった」と言うだけで「一刻も早く自分で引き取って頑張って育てなきゃだめよ」というふうに、非常にまじめに娘を応援しているのですが、建前で対応する方のようです。そうは言われても、マンションで一人ぼっちで、赤ちゃんは泣くし、熱は出すし、という中で、母親は一つ一つの対応に自信をなくしてしまっている。家族は、それぞれの思いがありながらバラバラなのです。

結局、赤ちゃんもお母さんのただならぬ状態で緊張して、眠れなくなったり泣いたりしているわけです。赤ちゃんの状態がお母さんの不調のあらわれなのです。お母さんの様子は、手を診ると冷たいし、脈も普通60以上なければいけないのに50ぐらいしかない。深部体温は、普通は若者だったら36度なくてはいけないのに35度ぐらいしかない。きれいにお化粧して凛としていますが、孤立感をひしひしと感じるわけです。このお母さんが危機状態で早く脱しないといけない、お母さん中心になりましょうと、2時間ぐらいの相談で集中して話したのです。

私が「赤ちゃんを育てているときのお母さんの一言って焼きつくわよね」というと、横でその話を聞いていたお姑さんは泣き出しているのね。謙虚に「自分もそうだった」と。自分も嫁ぎ先に行って頑張っていたのに、1人目の子供のときには男の子で喜んでもらって、年子で次の子供が生まれたら途端にお姑さんから、「続けて生むのは何だ」と。その一言で結局近所の人にも2人目の子供の出産のことは言っていない。嫁ぐとか新しい家族をつくるということがどんなに心細いことか。そのときに上から「こうある

渡辺　久子
慶應義塾大学医学部小児科教室講師・小児精神保健医
1948年東京生まれ。慶応義塾大学医学部卒業。小児療育センター、横浜市民病院神経科医長を経て、ロンドンのタビストック・クリニック臨床研究員として留学し、精神分析と乳幼児精神医学を学ぶ。1993年より慶應義塾大学小児科専任講師となり現在に至る。世界乳幼児精神保健学会副会長。社会保障審議会児童部会委員、横浜市次世代育成支援行動計画検討委員会委員。横浜市港北区在住。

べきだ」と言う人がいるとどれほどつらいかということを、そのお姑さんが涙を流しながら言ったわけです。この人がほんとうにかわいそうだって言ってくださった。そうしたら、その彼女が初めてワーッとほんとうに泣けたの。それでやさしい顔になった……。

【司会】 渡辺先生のお話をきいていていつも感じるのは、母子の関係を包み込んでみてらして、そこを取り巻く家族の関係を安定するように調整されている。その暖かさが母親の安心感と柔らかさを引き出している、ということです。このケースでは親との関係のジレンマが背景としてあったということですね。

親子の世代間ギャップ―うまくいっていない母性の伝達

結局、私自身が実家のおばあちゃまにお電話して、そしてよく話をしたのです。自分でとても電話できないと言うのね。つまり母親が願っていた大学へ行かないで音楽の道に走った。外から見ると一見自由そうに見えながらも、やはり時代の価値観の違いというものの中で血を分けた母娘がずれてしまっている。母性の伝達がうまくいっていない。

お母さんのほうの許容量を大きくして、あなたたちの時代のことはわからないわ、でも自分は大事にしなさいね、自分が責任を持つのよという本質を伝えていくような感じであれば、うまくいくと思うのだけれど。そのときに母親が裏切られたとか、昔の価値観で切ってしまうと、娘たちがものすごいジレンマに陥って、自分は若者として自分の道を開かなきゃいけないと振り払っていく。そこら辺から一種の絶好状態になってしまう。すごく悲しい。

親の成長を助けるための支援のあり方

【大豆生田】 まさに、親子関係の問題の背後に世代間伝達の問題があるのですね。深く、難しい問題です。幼稚園や保育所で保育者の最大の課題は、親とどうかかわるかということです。そのため、家族援助や親へのかかわり方の研修がとても求められています。最近では、保育士養成課程においても「家族援助論」が必修になりました。けれども、現代の親は自己中心的だとか、子どもへのしつけができていない親が増えたといった表層の問題は出てくるけれども、そのような親子関係に踏み込んだ支援の手立てまでは、なかなか得られないのが現実です。

たまたま私がかかわったある園での母親の事例です。その母親は一見とても自己中心的な方で、園が合わないと言って、突然子どもをやめさせると言い出したんです。毎朝遅刻はするし、保育者からみて問題を感じる親でした。そのためか、子どももすごく乱暴で、物を投げたり、友達をたたくなど、とても気持ちの荒れた子でした。園としては、「勝手にやめればいい」と言ってもよかったのかもしれませんが、子どものことも考え、園全体でそのお母さんの気持ちを聞いて丁寧にかかわっていこうということになりました。母親に丁寧に話をすると、意外と簡単に園をやめないということになりました。

【渡辺】 それは偉い。

【大豆生田】 その後、何カ月か話をしていくうちに、その母親は自分の子どもがかわいいとなかなか思えない方であるということがわかりました。そのため、保育者集団で子どもをしっかりと受け止めながら、その子のよいところを伝えるように努めました。そして、母親との会話を増やし、なるべく母親の思いを肯定的に聞こうという姿勢でかかわっていったのです。すると、ある日、その母親は自分の母親（子どもの祖母）がなぜ自分に対しては厳しくあたっていたのに、この子にはとても甘やかすのかと涙ながらに語りだしたのです。この日がこの母親のターニングポイントとなりました。以前よりも、園を信頼し、子育ての悩みを語り、自分なりに子どもへのかかわり方を変えるように努力しはじめたのです。この事例では、保育者と親との長期間のやり取りの中で世代間伝達の問題がみえてきたのです。

【渡辺】 それが大事、内面がね。

【大豆生田】 このようなかかわりは決して簡単ではありません。保育者が日常的なかかわりの中で、子どもと母親をともに肯定的に受け止めていったことがとても重要であったと思うのです。このような保育の場での日常的なかかわりの中に子育て支援の大切な営みがあるのではないかと思います。

【渡辺】 そこがポイントだと思います。治療の場面でも、私たちはさりげなく、5歳の子どもの親だったら「あなた5歳のときどうだったの」とか聞いてご本人に話させるんです。自分の幼児期の本音が

大豆生田　啓友（おおまめうだ　ひろとも）
関東学院大学人間環境学部　専任講師。臨床発達心理士。
1965年栃木県生まれ。青山学院大学大学院文学研究課修了。青山学院幼稚園教諭などを経て現職。専門は、幼児教育学・保育学。日本保育学会理事、神奈川県幼児教育協議会委員、横浜市市民活動運営委員会委員、NPO法人びーのびーの専任アドバイザー・理事。3人の子ども（10歳、3歳、1歳）の父親。横浜市港北区在住。

出せるようになってくると、親はガラッと変わる。

私が今まで見てきて、お子さんの問題を抱えている方たちは、例外なく、決して幸せではない子ども時代を過ごしている。例えばそのときにほんとうによく生き延びたわねって言ってあげると、そこからグワーッと出てくるの。幸せではない方たちは苦労しているから、はるかに深くなれる。

子供の問題や親の問題、私たちが眉をひそめるような行動の裏には、必ず何か1つその人だけの苦しみとかがあるんですよね。そこを掘り起こしてあげると、ほんとうに見事に変わる。

【司会】 そうすると、深くその人の人生の起こってきたことを聞いてあげられる人がいるかどうかというのが、重要になるわけですか。

【渡辺】 園自体が子供という名目で親子を包んでしまう。そして深いところに入るにはさりげないことが大事なの。よく見ていると、その日だけの暗さってあるでしょう。そのときに「どうしたの、あなた」と声をかけると、「この人はわかっているのだ」と、感じるわけ。日々園の中で子どもとお母さんを見て、そういう人に対する感性を磨く、経験の豊かな先生たちが家族支援学をマスターされると、私は伸びていかれると思うんです。

【大豆生田】 そうですね。日常的にかかわる場所として保育園や幼稚園は、一番身近なところで、気軽に自分の話や子どもの話をしたいという人は意外と多いと思いますよ。しかし、実際はいつでも気軽に相談してくださいというのは、なかなか難しいのも現実です。保育者はいつも忙しいし、相談となると力量も必要です。

【渡辺】 そのとおりだと思う。子供預かりビジネス的にやっている間は親との利害関係で衝突すると思うんです。だけれども、今の家族は孤独だし、親戚がいない人も多いし、友達がいない場合もある。園の先生がその子への真心をさりげなく積み重ねていくことによって、2年目、3年目というのは親の側が知らない間に心を開いていると思うんです。親にとっての園になったときに親がグッと成長する。だれもいないところで1分、2分のかかわりを持つということを丁寧になさる、あるいはあいさつの仕方が丁寧だけでも違う。

【大豆生田】 忙しい場をいかに忙しくなく見せるか、ある保育者の方はそれを「水鳥作戦」（水面はすまし顔していても、水の下は忙しくバタバタとする）とおっしゃっていました。

【渡辺】 賢い、そのとおりです。

【大豆生田】 保育の場も、一方ではサービス化というか、何でもやってあげますよという流れがあるのですが、もう一方では親とパートナーシップを組みながら一緒に保育しましょう、という方向性もある。私はそれが非常に大切だと思っています。

【渡辺】 親のやる気にエンジンをかけていくということが大事な役割ですよね。また、親が変わってくれると先生たちもやりがいが出てくる、親がうまく変われるような応援の仕方をどういうふうにしたらできるかということを、先生たちが互いに交流し合う。事例検討が大事ですよね。

【大豆生田】 私は幼児教育や保育の場の子育て支援って、まず基本は保育の日常にあると考えています。先ほどの話のような、園児と保護者に対して保育者が日ごろから行っているサポートは、あまり「子育て支援」とは呼ばれません。でも、実はこれが一番の子育て支援ですよね。これから、ここに光を当てる必要があると思います。

【渡辺】 限られた時間の中でいかに質の高い関係をつくるか。親の側は、その子ときちんと向き合ってもらえているということが一番のごちそうだというふうに言ってくださるんです。医療も同じです。サービス業ですから。私は冗談に、「デパートのエレベーター嬢とか銀行のドアを開ける人並みに丁寧なあいさつをしなきゃだめよ」と言うのですけれども。自分を待ってくれている人がいるかどうかというのが求められているのですよね。

【大豆生田】 親としては、「何々さん、おはようございます」と保育者から声をかけてもらえるだけでもとてもうれしいのです。しかも、誰々ちゃんのママとしてだけではなく、一人の人間として自分の存在が認めてもらえるというのが、とても重要なことなんですね。

【渡辺】 本質的なことですよね。自分の居場所がその人の心の中にある。

今の時代はあるべき姿も大事だけれども、ほかも選べる時代なのにその親がこの園に来てくれるとか、病院にわざわざ来てくれる、あちらの側の無意識に出会いに来るという事実を、こちら側が大事にしなければいけないと思うんです。そして、何でも言っていいのだ、という感じの器をこちらが用意できるかどうかですよね。

2 地域における子育て支援

進む育児の孤立化

【司会】 「子育ては大変ね」というようなねぎらう文化が昔はもう少しあったような気がしますが。

【大豆生田】 地域の中で私自身が子育てをしていて、ものすごい変化だと思っているのですが、現在は気軽に小さな子どもを外に出せるような状況ではなくなってしまったのです。

【渡辺】 これは大きな問題。

【大豆生田】 子どもに対する事件や、不審者騒動なども増え、小さな子どもをもつ親には不安があります。地域に親戚や知り合いも少なければ、なおその不安は大きくなります。

【渡辺】 親が不安をもつ、ということで子どもを守る部分があるからしようがないと思うのですが、それでいいとは思えません。たとえば、イギリスの都市計画では、親の仕事場と自宅との距離は15分ぐ

らい。職場からお昼を食べに家に帰り、保育園に行っている子どももお昼を食べに家に帰ることができる。たとえば、ケンブリッジとかオックスフォードとかは、長い通勤は、避けるように町ができている。

日本には、子どものための都市計画という発想がほとんどないですよね。大人の勤務に付随してどこに預けるか、でしょう。家族を応援していく町づくりを考える必要がある、と思います。小さな保育園をポストの数ほどつくる、というのが北欧の考え方です。

【大豆生田】 日本では、子どものため、あるいは子育てのための町づくりという発想はあまり出てきませんよね。現在では、特に一日中小さな子どもと一緒に暮らしている専業主婦家庭の子育ての孤立化は進んでおり、負担感も非常に大きくなっています。

【渡辺】 専業主婦というもののよさを生かしながら、孤立感や一人の人間として一瞬自由にならないということあたりは、解消しなければいけない、と思います。

先日、小学生と中学生のお子さんのお母さんが子どもの不登校のことで相談にこられました。夫は、大学の教員で、家で仕事をしている。それに合わせて専業主婦をしていたけれど、もう十数年、自分が自分になれる瞬間がなかった。すごく苦しくなってしまって、危機が深刻になって取り返しがつかない、というところまできてしまっていたので、「あなたは、奥さんの苦しみを本当に受け止める気があるか」という深刻な話をご主人にしたんです。ご主人が偉かったのは、家にいながら憎しみの視線を感じた、と言うの。

幸い、その場でお父さんがギブアップして、ここまでこられたのもきみのおかげだ、といって、目の前で大きな仕事をほんとうに断った。そして、今日は、僕が家にいるから完全に外に出なさい、と言って、奥さんは初めて一日家から外に出ることができたわけです。そして、放送大学のテストを集中的に勉強して、試験に受かったのです。そして、「この結婚は悪くはないわ」と思った、ということです。能力のある方ほど、悩みが深くなる。

【司会】 父親が、家族をとる、といえるぐらいの社会にならないと、本当の意味では、変わらないのかもしれないですね。次世代のニーズ調査で、「今の社会は子育てを評価しているか」と聞くと、評価していると思っている人が1割しかいないのです。

【大豆生田】 父親の役割が非常に大きいですよね。父親が家庭や子育てにどれだけ本気でかかわれるかがこれからの大きな鍵だと思います。これが進まないと、かなり深刻な事態になるのではないかと危惧します。子育てが母親一人の肩にのしかかっていることが、母親の育児への負担感のみならず、子どもの発達へも影響をおよぼしていると考えられます。特に男性の「働き方」の見直しをさらに真剣に考えていく必要があると思いますね。

「こんなはずじゃなかった」育児の大変さ

【司会】 かつての時代から見れば、育児休業制度もできているし、保育園もできていますし、労働時間についても多少の制度ができた。子育て支援の制度が整ってきているのに、不思議ですけれどもね。

【大豆生田】 私などもそうですが、子育ては「こんなはずじゃなかった」というのがありますよね。

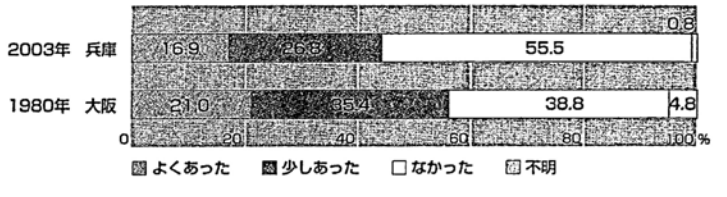
【渡辺】 実際に、普通に勉強し、仕事をしてきた人たちには想像できないくらい赤ちゃんの要求って24時間だから大変ですよね。

【大豆生田】 夜泣きもとてもタイヘンでした。多少、私のように保育の勉強をしてきても、頭でわかっていることと実際の子育ては随分違う。私たち現代の親世代は、小さな子どもの面倒を見るという経験が非常に少なくなっています。いきなり赤ちゃんが来て、自分が思っていた範疇をかなり超えてしまうのですね。そこから、「こんなはずじゃなかった」という声が生まれてくる。

原田正文さんたちが23年前に『大阪レポート』（注1）というのを出し、昨年、『兵庫レポート』という乳幼児をもつ親への調査結果を出しています。それによると、23年前と比べて、自分の子どもが生まれる前に小さな子どもの面倒を見たことの経験が見事に少なくなっていると言います。子育ての孤立化という話で言えば、特に4カ月あたりで、子育ての友達がいないという数がものすごい数です。この子育ての孤立化は都市部では非常に大きな問題で、横浜でも真剣に考えなければいけないことではないかと思います。

【渡辺】 完全な密室化ですね。

図1　あなたはご自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありますか



（注1）1980年と2003年に同一項目で実施した、乳幼児の親を対象とした大規模な実態調査。原田正文氏（大阪人間科学大学社会福祉学科）らが厚生労働科学研究として実施した。

居場所づくりー大人が自然に楽しい広がりをつくる

【大豆生田】 最近、テレビやビデオなどの視聴時間の問題が指摘されています。これは何とかしなければならない深刻な問題だと思います。ただ、地域の中で孤立化した親子にとっては、家にいてテレビやビデオをまったく見せないで過ごすのは難しいという声もあります。特に横浜は児童館もなく、親子の居場所が得られにくいという実態もあります。自分の家と公園とスーパーマーケット。この3つを毎日ぐるぐると回って毎日が終わるという親子もいます。だから、「テレビやビデオを見せるのはよくない」というだけのスローガンでは、なかなか解決されない問題かもしれません。

だからこそ、孤立化してしまいがちな地域の子育て環境を変えていくことが絶対に必要だと思うのです。その大きな取り組みのひとつが、親子の居場所（ひろばやサロン）作りだと考えられます。港北区にできた親子のひろば「びーのびーの」（注2）は、地域の中に親子の居場所が必要だと考えた、小さな子をもつ母親たち20人が、自分たちで自分たちのための場をつくろうと立ち上がって、平成12年に誕生したものです。安心して一緒に子育てできる場所と仲間がいることがどれほど大切かを実感させられています。

【渡辺】 私もありがたいことに両親が絶対に子どもは見ないと言ってくれたので、全く頼らなかったのね。まず、納得のいく保育園探しからはじめました。私が子どもたちを預けていた保育園は、園長先生が、子供の伸びる力をつぶすなということで、徹底して安心できる信頼関係の場を家庭としてつくりなさいというようなことを、おっしゃっていた。地面のつながりということをほんとうに真剣に考えて、保育園の親同士が仲良くなって、月1回、丹沢に登ったりしました。

学校に入ったときには放課後の問題が出てきたので、港北区の調整区域のほうに借家を1軒ずつ借りて、その地域に5家族が住んで学童保育をつくったのです。子供たちをみんなで見ていこうと。

ところが、息子は、うるさいおばちゃんがいる学童は嫌だと言って、家をこじあけて入っていたの。そして、どうしてもお母さんが学童に行けと言うのなら、僕もお母さんに仕事をやめろと言うと言って、人間対人間の話し合いになってしまった。

ほんとうにこれはつらいだろうなと思ったので、大学生のお兄さんを家庭教師並みの待遇をして、アルバイトに雇ってきてもらった。そして自宅の一部屋を完全に地域の子供が出入りしていいように開放したんです。

そうしたら、すぐ隣の奥さんが、野毛山図書館の絵本を300冊借りて子供文庫をしてくれた。袋菓子などを置いておくとお兄さんたちが路地に向かって「おやつだぞ」と声をかける、すると近所の子供も来てくれるようになったわけです。それで、分け合うという保育園の生活の延長になって、そこから子供会ができたんです。

近所のお父さんとお母さんとも大人同士が仲良くなったの。いいコミュニティーになったのですよ。

子育てが終わった今は、子供文庫で子供をほんとうにかわいがってくれて、私の血のつながっていない姉妹みたいな感じの人たちが、地域の精神障害者のところでおいしいクッキーをつくったりしている。ごく自然にうまくいったのね。大人にとって楽しくて、魅力があるから拡がる。

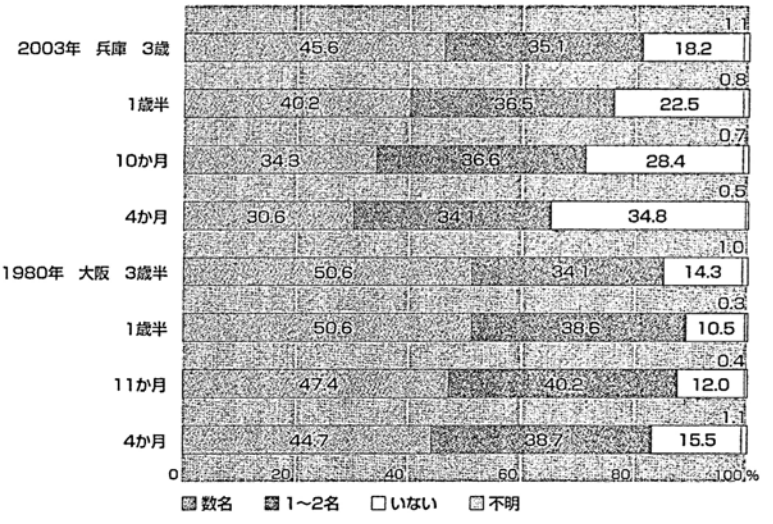
【大豆生田】 子どもも大人も共に楽しみながら過ごすことのできるコミュニティですよね。しかも、自分たちで作っていったコミュニティは、制度が「こうあるべき」といったかたちでおりてくるのと、ずいぶん違うのだろうと思いますね。「びーのびーの」も、そこにおもしろさや、何らかの必要性があるから人が集ってくる。そして、新たな活動や新しい関係性が生まれる。そこが素晴らしいと思っています。

【渡辺】 生き生きとした魅力的な交流が持てると、人は集まってくるのよ。

【大豆生田】 「びーのびーの」のスタッフはみんな子育て当事者でもあるから、あんまり自分は子育て支援者だなんて感じはないですよね。いろいろな人たちが自分の持っているものを出していきながら、子どもはその周りで結構楽しくやっていたりする。そこが魅力的なのかな。

【渡辺】 そうなんですよ、子供は親の仲、大人同士の仲の

図2　近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか



よさを見ているわけです。「子供を」というふうに義務的なものがなくなって、自分たちの楽しい出会いの中に子供をきれいに巻き込めるようになってくるのね。

例えばそのプロセスの中に子供文庫をやりたい人に野毛山図書館は300冊を無料で貸し出す、それから、「母親クラブ」の助成金を出す、とかの制度はとてもありがたかった。自分たちが一緒になって申請したら、それにこたえてくれる行政があったというのがうれしいわけよね。

【大豆生田】市民が必要としてはじめた活動に対して、行政が支援する。まさに協働ですよね。それと、親が子どもをみるのを義務的にばかり考えずに、いろいろな人がみるというのも大切な視点ですね。

居場所づくりの量的普及から質的なものへ—支え合いのネットワークづくりへ

【大豆生田】「びーのびーの」では、大学生などの学生がいつもいて、子どもと遊んでくれるというのも魅力的なんです。

【渡辺】いいわねえ。

【大豆生田】子どもにとっても、親にとっても、こんなありがたい存在はない。乳幼児の親子と大学生、この両者は普通だったら出会う機会はないんですよ。その出会いの場になっているのもおもしろい。この夏休み、学生の家庭派遣事業というのが行われました。学生さんが乳幼児のいる子育て家庭に入って子どもと遊んだり、一緒に料理を作ったり、場合によっては少しの時間預かるというケースもありました。これが親子に大好評だったのです。また、学生さんたちにとってもすごい自信になったのです。何かこうやっていろいろな世代がつながるような仕掛けがこれからは必要になってくると思います。中高年世代と親子のかかわりや、父親のネットワークなども、これからとても大切だと思います。

地域の親子の居場所が増えていくことはとてもよいことです。ただ、量的な普及だけではだめです。ただの「屋根付き公園」ならば、本当の居場所や子育ての支え合いの形成の場にはなりません。せっかくひろばに来ても、そこに仲良しグループがあって中に入れなければ、もう来なくなってしまうでしょう。子どもが楽しく過ごせる場でなければ、親もほっとできる場とはならないでしょう。だからこそ、ひろばが親子にとっての本当の居場所となれるような環境づくりや、つながりのコーディネートをすることが必要となってくるのです。ここにひろばの質があるように思います。

子育てひろばがあることによって、孤独な子育てから開放され、親子がほっとできて、仲間もできて、元気になれることが大切です。このようなひろばが身近にあることが、虐待や子育ての不安など問題の予防効果としても、とても大きな意味を持っているのです。

【司会】地域によっては、地区の社会福祉協議会などの地域組織が、子育ての支援活動をしていたり、当事者グループがNPOをつくりながら、活発な活動していたり、いろいろな動きがでてきているのが横浜なんですよね。

【大豆生田】そうですね。様々な主体が動き出しています。それぞれの公的な機関もとても活発に子育て支援を行っていますよね。民間としては、以前から続けられているような保育グループや文庫活動などもとても素晴らしく、私たち親世代もたいへんお世話になっています。冒険遊び場（プレーパーク）の活動なども、子どもも大人も本気で遊ぶことができるとても魅力的な活動ですね。それから、「よこはま一万人子育てフォーラム」（注3）という中間支援組織もあり、様々な団体や行政、関係機関とをつなぐ重要な活動を行っており、とてもアクティブです。それ以外にもたくさんの活動があります。

まさにこれからは、子育てのよりよい場やネットワークが形成され、地域のすべての世代が子育てにかかわっていくような仕掛け（装置）が大切になると思います。それぞれの地域で「子育てがおもしろい！」という感じの賑わいを演出していくことが大事だと思います。横浜が子育てを市民みんなで支えあう街になれば、将来はとても明るくなるのではないでしょうか。

【司会】あきらめずにみんなが楽しく続けることですね。今日は、お忙しいところありがとうございました。

＜司会＝編集部＞

（注2）
「おやこの広場びーのびーの」
0，1，2，3歳児と親のためのもうひとつの家として港北区菊名の商店街の約20坪の空き店舗のスペースに、平成12年に誕生。児童館のような施設がなかったことから、乳幼児とその親が一緒に和める場所を、当事者である親たちが作ったもの。子どもの生活リズムに合わせた様々なプログラムを提供し、スタッフの他に子育てサポーターや学生ボランティアなど多くの人が関わって運営されている。親子の居場所づくりの先進時モデルケースである。「NPO法人びーのびーの」（代表　奥山千鶴子氏）は、この広場の運営以外にも、子育てに関する講演会を実施したり子育て関連情報誌の発行し、子育て関連の団体や機関のネットワークの中核的存在となっている。

（注3）
よこはま1万人子育てフォーラム
横浜市内18区の子どもの育ちや親を応援する団体や個人が集まり、親も子ものびのびと暮らせる豊かな地域社会が実現するようにと願い、活動している任意団体。1999年、横浜市の「子育てが楽しいまち横浜委員会」の委員会に参加したコアメンバーが中心となった「よこはま子どもネット」が「1万人子育て提言プロジェクト実行委員会」を設立。「横浜の子育て環境に必要なこと、欲しいこと」をテーマに、市内約7000通の提言を横浜市へ提出。その後、「よこはま1万人子育てフォーラム」に改称し、横浜市から、「親子の居場所調査」を受託し、それをもとにシンポジウムを開催するなどの活動を積み上げてきた。